

## 遊びを生み出す子どもの力⑤ 水と生み出す遊び

認定特定非営利活動法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク  
三浦忠士

暖かい季節、自由に水が使える環境にあるとき、子どもたちはそれを使って遊びはじめることが少なくない。暑い日に水へ手や足を入れると、ひんやりとして気持ちがいい。水面をバチャバチャと音を立てながら手でたたくと、キラキラかがやく水しぶきが飛び散る。茂みから葉っぱを千切って水面に放つと浮いて、風に身をまかせながらゆらめく。乾いた地面に水を垂らすと、スッと色が変わる。気心の知れた相手とであれば、水をかけ合うのも楽しい。土を掘ったり竹を割ったりして、水の流れる水路をつくる子どももいる。子どもたちは水が自由に使える環境にいるとき、それに関わる多種多様な遊びを次々と思いつき、楽しむ。今回のレポートでは、このような水を自由に使える環境で子どもたちが生み出した遊びの事例を紹介していきたい。

はじめに紹介するのは、2024年8月2日（金）10:00～15:00に仙台市若林区の仙台市立古城小学校で開催された「ふるじろプレーパーク」での事例である。この日は図①のようなウォータースライダーができる楽しみにして集まった子どもたちが遊びに来た。開催を告知するチラシに去年プレーリーダーが木材とブルーシートで手作りしたウォータースライダーの写真が載っていて、それで遊べると思い込んでやってきたようだった。最高気温が31.5℃に達したこの日は、まさに水遊び日和だった。しかしながらこの日はプレーリーダーが2人しか現場入りできず、ウォータースライダーを作ったり管理したりすることは困難なため、設置を見送ることになっていた。そのため、このことをプレーリーダーから伝えられてがっかりする子どもたちは少なくなかった。これを受けてプレーリーダー2人でも管理できて、いつもよりはダイナミックな水遊びができる環境を整えようと、ブルーシートの端を丸めて水が溜まるようにした上で、水道につないだホースで水を注いで水深の浅い図②のような簡易的なプールを作ることにした。

水が溜まるまでのあいだ、子どもたちはプレーリーダーが



準備した水鉄砲で図③のような水をかけあう遊びを楽しんでいた。やがて水がある程度溜まってくると、小学生は水しぶきを上げながらプールの中を歩き回ったり、這ったりする遊びをはじめた。幼児は友だちと水の中に座って、そのひんやりとした冷たさを味わいながらおしゃべりしていた。

時間の経過とともに、小学生の遊びは少しずつ大胆になっていき、図④のように足で水を蹴り上げて友だちとかけあう遊びをはじめた。その遊びにはやがて、漫画やアニメの戦闘シーンで登場人物が繰り出す技を模した、ごっこ遊びの要素も加わっていった。水をかけあう遊びはプールに水が溜まる前にも水鉄砲を用いて楽しまれていたが、プールの水を足でかけ合う遊びは足の動きや体の姿勢を変えることでかけ方をアレンジしやすいので、ごっこ遊びとの親和性はより高いように感じた。



そんななか、1人の小学生がプレーリーダーのところにやってきて、水風船の作り方を教えてほしいと頼んできた。水遊びに使おうと自宅から持ってきたものの、うまく作れず困っていたようだった。プレーリーダーに教わって水風船を作ることができたその子は、どう遊ぼうか少し考えたあと、プールの中にいた他の子どもたちに向かって声をかけながら水風船を投げた。するとこのことをきっかけにして、水風船をだれがキャッチできるか競う図⑤のような遊びがはじまった。水風船を投げる役を交代しながら、子どもたちはこの遊びをしばらく楽しみ、水風船を持ってきた子どももそれを見て少し得意げな様子だった。



やがて正午となり、お昼ごはんを食べたりプレーリーダーが準備したスイカを使ってスイカ割りを楽しんだりするなどしながら、ゆったりと子どもたちは過ごした。そしてそれに飽きると、暑さも相まって子どもたちはプールに向かって行った。



午後になってはじめて盛り上がったのは、図⑥のように大勢でタイミングを合わせて同時に飛び跳ねて、大きな水しぶきをあげる遊びだった。お互い声をかけあって一斉にジャンプして、狙いどおり派手な水しぶきが上がると、ワッと歓声が上がった。プールの外からそれを見ていた子どもたちも面白がって次々に加わり、何度も何度も楽しんでいた。

次にプールではじまったのは、花いちもんめだった。遊びの内容は一般的な花いちもんめと変わらないのだが、仲間と一斉に足を上げるときに図⑦のように大きな水しぶきも上がって、そのたびに子どもたちは歓声を上げた。水がよいアクセントとなって、いつもの遊びに新しい楽しさが加わったようだった。



やがてプレーパークの終わる時間が近づくと、子どもたちはよりダイナミックな水遊びを楽しむようになっていった。1人の子どもがプールの端から駆け出したかと思うと、その勢いを活かして図⑧のようにスライディングをした。それに合わせて大きな水しぶきが上がり、見ていた他の子どもたちがワッと歓声を上げて、代わるがわるスライディングしはじめた。濡れたブルーシートはよく滑るので、上手いくとプールの端までスーッと滑っていった。そのなかで水に突入する姿勢に図⑨のようにアレンジを加える子どもたちも現れ、ヘッドスライディングを試みたり、前転を試みたり、側転を試みたりと、新しい楽しさを探求する姿を見ることができた。



はじめはプレーリーダーが設えるウォータースライダーで滑ることを楽しむつもりでやってきた子どもたちだったが、単に水が浅く溜まっているだけの簡易的なプールでも楽しめる遊びを、これまで見てきたようなかたちで自ら次々と生み出していったのだった。

このように自由に水が使える環境で、子どもたちがそれに関わる遊びを生み出す事例は、他にも無数にある。例えば2023年7月25日（火）に仙台市若林区の七郷中央公園で冒険あそび場ネットが開催した「七郷中央公園プレーパーク」では、同じような簡易的なプールに水を溜める過程そのものを楽しめる遊びを、子どもたちが生み出す事例に出会うことができた。プレーリーダーがブルーシートと木枠でプールを手作りして、公園の水道からバケツに汲んで運んできた水を溜めていたところ、それを見た子どもたちがよほど早く水遊びしたいのか、手伝ってくれた。しかしながらなかなか水が溜まらず、子どもたちは心が折れてしまったようで、やがて水を運ぶのをやめてしまった。とはいえプールで早く遊びたい子どもたちは、何かもっと楽に水をプールに溜める方法がないか考えはじめた。そのとき、プレーリーダーが工作の材料になればとプレーカーに積んでいた竹を見つけた子どもがいた。そしてそれを雨どいのように使って、水道からプールに水を直接流し込むことを思いついたのである。はじめは竹だけでそれを実現しようとした子どもたちだったが、水がうまくプールまで流れるように勾配をつけることができず、うまくいかなかった。何か使えるものはないかと再びプレーカーの中を子どもたちは物色し始めた。そして工作台や折り畳みテーブル、桶などを見つけ、それらを使って竹に勾配をつけて、図⑩のようにうまく水道からプールまで水を流すことができたのだった。



先の「ふるじろプレーパーク」の事例で花いちもんめと水を組み合わせるように、子どもたちは水と別の遊びを組み合わせてもっと楽しめる遊びを生み出すような事例も、たびたび見せてくれる。2017年4月22日（土）に仙台市若林区の荒井4号公園で冒険あそび場

ネットが開催したプレーパーク「七郷あそび場」では、ベイベレードと水を組み合わせて、子どもたちが新しい遊びを生み出していた。このころ「七郷あそび場」に来る子どもたちのあいだではベイベレードが流行っていたが、専用の台であるベイスタジアムの上で複数のコマを回してぶつけ合う定番の遊びは飽きられはじめていて、それ以外の遊び方がいろいろ試されていた。この日はプレーリーダーが持ってきた木材でつくった図⑪のような坂道めがけてコマを放ち、その下に置いた台に乗せるのを競う遊びが盛り上がっていた。しかしながらこの遊びもやがて飽きてしまって、子どもたちは他に楽しい遊び方はないか考えた末に、図⑫のように水を溜めた容器にベイスタジアムを沈め、その上にコマを放ってぶつけ合う遊びを思いついたのだった。ベイベレード元来の楽しみに加えて、コマの回転が生み出す水しぶきも楽しめる遊びだった。2023年5月13日（土）に仙台市若林区の荒井七丁目公園で冒険あそび場ネットが開催したプレーパーク「荒井七丁目公園で外あそび！」でも、子どもたちが既存の遊びと水を組み合わせて新しい遊びを生み出していた。冒険あそび場ネットのプレーカーにはテーブルホッケーを楽しむことのできるキットが積まれているのだが、子どもたちはこの日、これと水を組み合わせた。図⑬のようにテーブルの上に水を満たして、ホッケーをスティックで打ち合うたびに水しぶきが上がるようにしたのだった。この日はこれにとどまらず、ふだんは黒板やアスファルトに落書きするのに使うチョークと水を、子どもたちは組み合わせた。図⑭のようにチョークを石で砕いて粉にした上で、水と混ぜて絵の具をつくり、絵を描いて楽しんでいた。

時として子どもたちは、空から降ってきた雨も気にならなくなるほど、水遊びに没頭することもある。2017年6月28日（水）に仙台市若林区の伊在二丁目公園で冒険あそび場ネットが開催したプレーパーク「伊在二丁目公園あそび場」では、雨が降るのも気にせず水遊びを楽しむ子どもたちの姿を見ることができた。図⑮のように桶に水を貯めてお風呂みたいに入ったり、ざるに向けて桶の水をバシャバシャかけたり、水を張ったタライにお気に入りのおもちゃを入れて図⑯のように洗濯機にみたいにグルグル回したり。雨で体中濡れてもお構いなしに、子どもたちは水遊びを楽しんでいた。2018年9月1日（土）に仙台市青葉区大手町の「のりっば」で開催されたプレ



ーパーク「のりっぱであそぼう」では、雨を水遊びの素材として捉え、それが降るのをよろこぶ子どもたちの姿を見ることができた。

「のりっぱ」は、廃止された都市計画道路予定地の跡地を、住民組織「片平地区まちづくり会」が仙台市から借り受け、プレーパークや地域の行事等の開催場所として運営・管理している広場である。

「法面(のりめん)のはらっぱ」＝「のりっぱ」というのが名前の由来であり、その名の通りそれなりの傾斜がある。この日の「のりっぱであそぼう」ではこんな地形を生かして、図⑱のようにシートに

ホースで引いた水を流すだけのシンプルなウォーターライダーをつくり、子どもたちと滑って遊んだ。子どもたちはそのつど姿勢を変えながら滑り、どれが一番楽しいか遊びながらあれこれ試していた。そんなとき雨が降り始めたのだが、シートがよく濡れてさらに滑りやすくなると、むしろ子どもたちは喜んだのだった。



以上のように、子どもたちは水が自由に使える環境にいるとき、それに関わる多種多様な遊びを次々と思いつき、楽しむ。このことは、子どもたちの遊びを生み出す力の豊かさに加えて、決まった形を持たなかったり、他の物を濡らすことでその性質を変化させてしまったりするといった、水ならではの特性も関係しているのだろう。勢いよく関わりとしぶぎとなって飛び散り、かき回せば渦をつくり出し、高いところから低いところへ自ずから流れていく。物を濡らすとそれを滑りやすくしたり、温度を変化させたり、色を変えたり、溶かしたりする。このように自由で多彩な水の特性は、ただでさえ豊かな子どもたちの想像力をさらにふくらませ、様々な遊びをひらめくきっかけとして働くと考えられる。そしてこのような水を活かした遊びを楽しむ過程でも、他の素材とかかわる遊びの過程と同様に、子どもたちは水に関する経験を自ずから深め、自らを育てる。また、世代や立場を越えて遊ぶ機会を生み出し、そのあいだに新たなきずなのタネを蒔いたり育んだりするのである。